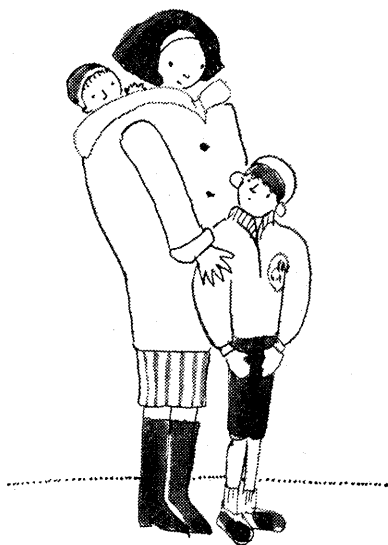


子どもの世界を共に生きること

津 守 真

子どもの考え方や見方は、どのようにして理解することができのだろうか。

子どもの考えは刻々に変化してゆくから、私共が知ることができるのは、いま眼前の子どもが何をしているかということだけであって、それ以上に、子どもの行為を予測することはできないという考えがある。いつもこの子はこういう風にするから、今度も同じようにするだろ



うと期待すると、その期待はしばしば裏切られるし、先入観をもつことが、現在をそのままに見ることを妨げるから、いま眼前で子どもがしていることだけしか、私は知ることができないという考え方は、一応、もつともである。それに対して、ある子どもは、その行為を継続して見ると、その子どもは、その行為の仕方の特色に気付かされるから、それぞれの子どもに独自の個性的な考え方を見出して、それに応じて子どもにも接することが必要だと考えることもできる。この二つの考え方はどのように関連するのだろうか。

ある日、K夫は、私のわきを通り過ぎて、実習生と一緒に、職員室に通じるドアのノブに手をかけた。その実習生は、ドアをあけて、K夫と一緒に廊下の方に出ていった。

この場面で、私は、K夫がドアのノブに手をかけたことをたしかに知ることができる。これだけでは、単に外的行動の観察にとどまるのだが、更に加えて、私は、

K夫はドアの向う側にゆきたいと思っていることが分かる。外的行動と内的世界とはあわせてひとつの行為である。だが、私はそこまでしか言う資格はないのだろうか。

これまで、私はK夫とのつきあいも多く、ドアから廊下に出て、階段をのぼり、二階の廊下を通り抜け、反対側のドアから庭に出て学校をひとまわりすることを何度もくり返したことがある。このような体験から、K夫にとって、薄暗い廊下を抜けてもとの場所にもどることは、学校の生活に習熟するのに精神的な支えになっているのだろうか。それだから、いま、ドアのノブに手をかけて廊下に出ようとするK夫の行為に、とくべつな意味を見ることができるといえる。この場合、その体験を思い起すことは、この行為の理解を助けている。もしも、同じ行為を予測して、K夫が他のことをしようとするのに、同じルートで学校をまわることへと導いたとしたら、ゆきすぎになるだろう。

この日、保育のあと、話しあいどきに、その実習生は、K夫の一日の生活を追って、詳しく話してくれた。

ドアをあけて廊下に出た後、階段から二階へと通り抜けるのを何度もくり返したこと、実習生の腕の中にくるまるようにして抱かれたこと、モップをふりまわして追いかけてよろこんだことなど、めずらしく、その実習生と一日中一緒に過した話は次々とつづいた。保育のあとの話は、行動の羅列と思えるほどに、具体的なことがつづくのだが、私は、こうして語られる一連の行為に子どもの世界があるのだと思う。その中のひとつの行為だけにどまるのではなく、一日を通してつづいてゆくその行為の全体が子どもの世界だといってよいと思う。

少しだけ説明を補足する。最初、K夫は私のわきを通りすぎて、実習生と一緒にドアの方に向った。いつもだったら、私に声をかけたり、私の手をひくことも多いのである。そして、私が思ったように、階段から二階へと通り抜けた。このことは、かなり以前に何度もやってい

たが、最近ほとんどしていなかった。また、腕の中にくるまるように抱かれたり、モップで追いかけたりすることも、ずっと以前によくやっていた行為である。この頃は、一日の中である時間をしっかりと相手をする、自分で遊びをみつけることが多くなっている。つまり、この日のようなことは珍らしいのである。また、K夫は、私に対するのと、女の実習生に対するのと振舞い方をかえている。このことは、他の人に対しても同様であって、K夫は相手に対して気をつかい、相手に合わせて行為する。女の先生と一緒にトランポリンにのっていて、ああ疲れたという一言で、さっとおたりもする。

この日に、女の実習生をつかまえて、ふだんより幼い仕方で一日を過したのには、それなりの意味があったのだと思う。それは、普段の日々が、この子どもにとって不適だということではない。積極的に活潑な日がつづいた後に、もっと幼かった日にもどるような日が挿入されるところに、成長の寂しさを感じさせられる。

K夫は相手に気を使い、人によって対応の仕方をかえる。気を使うというのは、相手がどういう状態にあるかを認識し、それを肯定し、尊重して自分の行動をきめることである。相手を傷つけまいとして自分を抑制することである。気を使えば、自分を十分に出せなくなる。これは愛の問題であるが、ある限界をこすと、自身の実実を表現しないことにもなる。

この実習生が語ってくれたこの日のK夫の一連の行為に、この子どもの世界はあらわれている。つまり、保育者は、子どもの一連の行為を共に過すことにより、子どもの世界を共に生きている。後に話をするときに、おとなの意識にのこるのは、行為の結果として記憶にとどまり易い部分である。K夫がドアのノブに手をかけるところは、意識にとどまりやすい部分であるが、その以前に、私の傍を通りすぎて歩いてゆくところで、すでに、より幼い時期の行動様式にもどろうとする心が動いているのであろう。その部分は、後の話し合いのときには省

略されてしまう。だが、保育の実践の最中に重要なのは、その部分を子どもと共に過すことだろう。そのときに、未来の展開はまだわかっていない。この実習生は、この一日を過すのに、未来は未知のままに、子どもの世界を共に生きていることによって、ここに叙述したような行為が、結果として生れたのである。

こう考えると、保育の実践は、まだ形にならない子どもの世界を共に生きることだといってよいだろう。

あとになってふりかえるとき、そのある部分が意味を与えられて、おとなの意識の中に位置づけられる。

(愛育養護学校)